

①

小宮の意識が初めてラジオに向いたのは、聞き覚えのあるメロディーが流れてきたからであった。交通情報を知らせるメロディーを聞くと、何故だか幼かった頃を思い出す。相も変わらず小仏峠トンネルは渋滞しているらしく、その事実がまた、小宮をセンチメンタルにさせた。まだ微かに温かい缶コーヒーの、そのぬくもりさえも疎ましく思えて、ほとんど生唾を飲むのと変わらない程度で唇から缶を遠ざけた。

ラジオを切ると車内は、異様なほどの静けさに包まれた。等間隔で設置されている街頭が、ほのかにオレンジ色の光を放っている。その光の列が一定のリズムで小宮を照らし、静かだったはずの車内に、単調な音の連続が響いているように思えてくる。しかし不思議なことに、そのオレンジの光に対してだけ、小宮は苛立ちを覚えなかった。真つ直ぐに立ち一定の間隔で道を照らしているそのオレンジの光の列が、小宮にとっては何先を照らしてくれる道標のように思えたからかもしれない。おおよそ小宮の人生には、これらのように一定の間隔で自分を照らしてくれるような人間は存在しなかった。そんなことを思うとボヤッと灯るオレンジの光が妙に温かく思えてきて、小宮はまた考えるのをやめた。そんな生温くて形の無い「何か」に縋ることが全く意味のないことだと、小宮は本能的に感じていた。

「 $\wedge$  それ  $\vee$  を捨ててこい。」

小宮にそう言い放ったのは、俗に言うところのヤクザであった。小宮がヤクザだという

わけではない。むしろヤクザであったのなら、幾分か今の気持ちも軽かっただろう。「^ それvを捨てる」ということは、小宮の普段の生活からは圧倒的に掛け離れている。考えれば考えるほど口の中が乾いてきて缶コーヒーに手を伸ばしたが、さっきの生温かさ思い出してハンドルに手を戻した。

何か気を紛らわす必要性に駆られた小宮は、自分の右側を走り去る車に集中してみることにした。ネイビーのBMWが軽快に、小宮の運転するスズキのワンボックスを追い越して行く。走り去って行くBMWのテールランプがどんどん小さくなる。ネイビーではなく実際はブラックだったかもしれない。習志野ナンバーだった気がするが今ではもう確信を持ってない。次に自分を追い越して行くのはどんな車だろう。きっとベンツだ、と予測を立ててみたところで、小宮は幼かった頃をぼんやり思い出していた。

小宮の母の実家は京都だったため車での帰省には時間がかかったが、遠ければ遠いほど幼かった小宮少年は嬉しかった。ロングドライブの最中、小宮少年は走り去る車に気を紛らわしていた。ちょうど今、小宮がやっているのと同じ様に。ふと思い出したそんなたわいもない過去の思い出が、自分の目頭に何か熱いものを集中させたことに気づいた小宮は、例のごとく考えることを止めた。

「捨ててしまえばそれで終わりだ。」

車の中で気を紛らわす色々をあらかた試してしまった小宮は、いよいよ「それ」と正面から対峙することにした。例えばピストルのような小さな^物vであったら小宮をここまで追い込むことはなかっただろう。例えば小宮が到底手にすることのできない程の紙幣の山であっても同じことである。

「それ」は小宮にとって、^それvとは呼べない存在であった。^ピストルvや^札束vとは比べ物にならない。「それ」を^それvと言い切ってしまうあたり、やはりヤクザはヤクザだ。もう一度ラジオを流そうと思ったが小宮はそれを止め、少し

だけアクセルを踏み込んでみた。オレンジ色のリズムが小刻みになる。それと同時に、ほんの一瞬、その小刻みなリズムに合わせてバックミラーに目を向けてみた。

案の定、いや、想像以上に、白く伸びた「それ」の一部が小宮を浸食する。その白さと美しい曲線がまた、小宮の動悸を誘発した。オレンジ色のリズムが徐々にそのテンポを上げていることに小宮は気づいていない。いつそハンドルから手を離してしまいたいと思ったが、小宮の手はしっかりハンドルを握りしめて離そうとはしなかった。やるしかないのだ。

二十分ほど車を走らせただろうか。その間小宮は、何度かバックミラーに目をやることで「それ」の存在に慣れようと試みた。未だどこかで勇気を振り絞る必要はあるものの、「それ」が小宮に及ぼす影響が薄くなってきているのは確かであった。だが「それ」があるということは、「捨てなければならない」ということと同義であり、小宮を陰鬱にさせることに変わりはなかった。口の中が乾いてくる。手に取った缶コーヒーが冷めきっていることを確認してから、小宮はそれを口に運んだ。最後の一口が喉を通って暫くすると、小宮は急にトイレに行きたくなってきた。時計を見ると深夜の二時を回っている。思えば、車に乗ってから時計に目をやったのはこれが初めてだ。すでに約三時間、ノンストップで運転していたことになる。尿意を催すことができるくらいには自分の心にゆとりが生まれたのかもしれない。そう思うと幾分か落ち着きを取り戻せた気がしたが、それと同時にさらなる尿意が小宮を襲った。しかし「それ」を捨てるのに一刻の猶予もないことに変わりはなく、また、できるだけ早く「それ」の呪縛から解放された小宮は、このまま車を走らせるべきだと考えたが、車から伝わる軽い振動が小宮の下部に猛烈な刺激を与えるようになった時点で、小宮は仕方なくサービスエリアに車を止めることにした。

「抜け殻」には見えない。それは今にも動き出しそうで、ほんの少しだけ眠っているだけのように見える。それくらいに「それ」は、あそこの自動販売機でコーヒーを買っている女性と同じくらいの生気を放っている。いや、小宮にとってはそれ以上の何かがある。「それ」には秘められている気がしてならなかった。その神秘的な生気は、美術館に展示されている有名な絵画が醸し出すものと酷似している。だから「捨てる」なんて勿体ない。勿体ないと思うから「捨てる」ことを躊躇っているのかもしれない。そう小宮は思った。そう考えていると、だんだんとその存在が芸術作品のように思えてきて、小宮にとっても「それ」がΛそれVと同じように思えてきた。小宮がやっと「それ」を直視できるようになったのは、このときが初めてだった。

どれくらいの時間が過ぎただろうか。後部座席に座るΛそれVは小宮を魅了していた。ΛそれVは、人間の最も美しく見える刹那を切り取り、体現しているように見えた。何もせず後部座席に力なくもたれているだけのΛそれVを小宮はただじつと眺めていた。

小宮が我に返ったのは、車の前を通り過ぎる男性二人組の声が聞こえたからであった。その瞬間、尿意よりも先にΛそれVの美しさを独り占めしたい欲求に駆られた小宮は、ワンボックスの後部座席に置いてあった毛布を丁寧にΛそれVに被せ、ドアを開けて外に出た。

この時間のサービスエリアにいるのは、トラック運転手の人間がほとんどであった。小宮はΛそれVが誰かに奪われてしまうかもしれないと思い、すぐさま車に戻ってその存在を確認したいと思った。しかし溜まりに溜まった尿はなかなか途切れることがなく、自分から勢いよく発射されるその生温かさが、また小宮を苛立たせた。

小宮にとってはもはや、ズボンのチャックを閉めているかどうかの確認なんぞどうで

もいいことであった。走って車に戻る小宮の頭の中には既に、「＼それ＼を捨てる」などという死命は無くなっていた。正確に言うとも頭の片隅には残っていたかもしれないが、＼それ＼の美しさがそのことを忘れさせていたことに間違いなかった。

車が近づくにつれ心拍数が上がった。後部座席の窓にはスモークがかかっているため、小宮の今いる位置からではまだ＼それ＼を確認することができない。遂にドアの前に立ったとき、小宮の息は上がっていた。距離に比例しないほどの息の上がりように、一度大きく深呼吸する必要があった。深呼吸の後、ドアノブに手をかけ開けようとしたが、ドアは開かなかった。鍵を開けることを忘れていることに気づいた小宮は、もう一度大きく深呼吸して、やっとのことでドアを開けた。

ピタッと、時間が止まった。小宮は、自分も死んだのかと思った。音も聞こえないくらいに、小宮のいるその空間だけが「無」に包まれた。さっきまでの息の上がりようが嘘であったかのように、小宮の呼吸は本当に止まった。その理由が＼それ＼の美しさであったのなら、小宮はまた神秘的な色香にうつつを抜かすことができ、幾分か幸せであったかもしれない。しかし小宮を「無」で包み込んだのは、後部座席に乱雑に置かれた毛布の存在だった。小宮の周りに音は無く、ただじっと毛布だけの置かれた後部座席を見つめる時間が繰り返された。小宮は、意味がわからなかった。混乱を通り越し、そこには「無」しかなかった。

一体どういうことだ。小宮の思考が再開したのは、開け放たれたズボンのチャックから深夜の冷たい空気が入り込んできた為であった。＼それ＼が自ら動く可能性などない。そうなるややはり、その美しさに見惚れた誰かが＼それ＼を奪ったということになる。しかし、人間の少ない深夜のサービスエリアで＼それ＼を担いで奪う行為は、間違いなく目立つ。用を足すことに時間がかかったとはいえ、車を出てから戻ってくるまでに十分もかかっていない。まず不可能だ。普段の小宮ならこういう場合、嫌

な汗を流しあくせくするところであったが、不思議なことに、小宮の中にそれほど焦りは無かった。小宮は自分が長い夢を見ていたのかもしれないと考えていた。自分の許容範囲を越える出来事に見舞われ続けた小宮は既に、心身共に限界を越え、焦るよりも先に現実逃避を始めていた。ヤクザからハそれVを渡されたことも、「それ」を捨てなければいけなかったことも、そうなるに至った経緯も、きつと全てが夢だったのだと。そう小宮は考えていた。そう思うと急に力が抜けて眠気がしてきた。目が覚めたら夢も覚めているに違いない。そう考えた小宮は、さっきまでハそれVに掛けていた毛布を使って眠ることにした。

ワンボックスの段差に脚をかけ中に入ろうとした途端、後ろから若い女の声が聞こえたが、小宮は無視して車に入ろうとした。

「あつ！この習志野のBMW、やっぱり黒だった！」

そうかブラックだったか。俺はネイビーだと思っていた。自分と同じような遊びをしている女の子がどんな人間なのか見てみたくなった小宮は、段差から脚を上げ、振り返った。

見覚えのあるBMWだった。そしてそれをまじまじと見つめる女の子は、シルエットだけでもその美しいことがわかった。小宮に背を向けた状態で車を見ているために顔は確認できなかったが、美しい人間が小宮と同じ遊びをしていることが何となく嬉しかった。

顔は確認できていなかったが、その身体のバランスの良さに小宮は見入っていた。初冬にも関わらずホットパンツから伸びている綺麗な生脚は、「寒そうだ」などと思わせ

ないくらいに輝きを放っていた。

車を確認することに飽きたのだろう。女の子が振り返りこちらを向いた。街頭のオレンジの光が彼女の顔を写し出す。オレンジ色の光はとても温かく、彼女の顔の白さをより際立たせていた。小宮は拳に力を込め、不意に自分の顔面を殴った。相当な力が入っていたのだろう。絶対に痛くない確信があったし、痛かったら困るのも思っていた。そして今、唇の端から流れてきた血と尋常じゃない痛みが、小宮が夢の中にいないということを決定づけた。

間違いない、こちらに向かって歩いてくるその若い女は、ヤクザが「それvと呼んでいた存在であり、小宮が捨てなければならぬ「それ」だった。眠気なんぞとつくに冷めた小宮はひとまず、開いたままだったズボンのチャックを閉めることにした。